【研究ノート】

官立高等商業学校の調査セクションと科外教育
――彦根高等商業学校調査課の写真資料をてがかりとして

坂野鉄也

はじめに

官立高等商業学校の多くには、「調査課」「研究部」などと呼ばれる調査セクションが設置されていた。[1] これらの調査セクションは、調査を主眼とするのみならず、学科目の内外を問わず生徒指導に直接、間接にかかわっていた。そうした活動については、これまでの高商史研究において必ずしも明確にされていない。それは、従来の関心が調査セクションではなく、その蒐集した史資料に向けられていたことが理由であろう。[2] 高商やそのなかの一組織であった調査セクションそのものというよりも、そこが蒐集した史資料の利用という観点から研究が始まったために、高商の調査セクション、およびその活動へはまだ十分に目が向けられていないのである。

そうした研究史にたいし、ここでは彦根高等商業学校調査課が蒐集した写真資料を手がかりとして、高商の調査セクションと教育との関わりという視点からアプローチする試みをなす。とりわけ、これらの写真資料が正規の学科目以外の教育活動において利用された可能性を探ることをつうじて、調査セクションの教育機能について考えてみたい。

調査セクションおよびその業務

調査セクションの柱となる業務はその名のとおり調査である。もちろん、調査のために必要な資料の蒐集・整理という活動もあるが、調査そのものが主たる業務となる。たとえば彦根高商調査課の業務は、「校務分掌規程　第十六條」で次の五つと規定されている。

一、商業及経済に関する諸般の調査を行ふこと
二、研究資料の蒐集分類整理及保存に関すること
三、調査用新聞の切抜整理及保存に関すること
四、調査報告の発表に関すること
五、其の他商業及経済上の調査に関する一切のこと[3]

第一にあげられるのは調査であり、資料の蒐集、分類、整理、保管は調査の過程で、あるいは、調査の後に付随するものなのである。[4]

彦根高商調査課は一九二六（大正一五）年五月二九日にいったん廃止され研究部となるが、一九三〇（昭和五）年一一月一九日に復活する。研究部と商品課を廃止したうえでの復活となったため業務は増え、次のとおりとなった。

一、商業経済法律及其の他之に関する学術の調査研究に関すること
二、調査研究資料の蒐集整理及保管に関すること
三、調査研究の報告、発表及公刊に関すること
四、資料の閲覧及貸出に関すること
五、講習に関すること
六、公衆の依頼による質疑応答に関すること
七、調査委員会に関すること

八、大礼記念奨学資金運用に関すること
九、商品陳列館の設備に関すること
一〇、商品見本の蒐集、整理及保管に関すること
一一、移植民調査室に関すること
一二、其の他調査研究に関すること[5]

従来の、調査および資料の蒐集に加えて、調査結果の公刊、講習、一般からの問い合わせにたいする対応などが加わり、調査を実施し史資料を保管・整理するという側面が強かったこれまでの組織から、学校内外への発信もおこなう組織への移行が明確となる。[6]

こうした調査セクションの活動はそもそも、教員の研究だけでなく授業を含めた教育とも密接に結びついていた。たとえば高商のなかで最初に調査セクションを設置した神戸高商のばあい、一九一一（明治四五）年五月に置かれた調査部は、「商務研究」という科目の開設をうけて坂西由蔵教授によって発案されたと学校史には記されている。[7]また小樽高商の調査セクションは産業調査会という教官の研究組織であったが、「小樽高等商業学校産業調査会略則」の第五條には、「調査は主として生徒をして之に当らしめ委員之を指導す」と記されており、[8]実際には教官の指導のもとで学生が調査にあたった。これらの調査については、報告会がおこなわれ、その成果を発表する機会が与えられた。[9]

調査セクションの有り様が教育と強く結びついていることは、彦根高商における調査課から研究部への移行によく示されている。調査課が研究部となった一九二六（大正一五）年にはまず、四月二三日に学校規定第二条が改定され、これまでの「商業実践」「商事研究」に代わって、選択科目の一つとして「研究指導」が開設された。研究部は、それを担うセクションとして同年五月二九日に設置されたのである。これにともなって、細則には校務分掌規程とは別に「研究部規程」が掲げられることとなった。研究部の目的は「商業経済及其の他の学術に関する調査研究及び之が指導を為す（傍線は筆者による）」こととなっている。そのため組織は、学校長が担う部長のもとに、彼が任命する任期一年の幹事四人（常務幹事と調査幹事がそれぞれ二人）が置かれ、さらに学校長が教官中より選んだ委員が研究調査事項をそれぞれ分担するというものとなっている。とくに、調査幹事は、「研究調査の統括」以外に「生徒研究の指導」を職掌としていた。[10]

また、この研究部が再び調査課となったことは教育、とりわけ科外教育との関係において重要となる。調査課が復活する少し前、一九三〇（昭和五）年六月二〇日には、海外事情研究会という生徒の団体が創設されている。この会はもともと、高商生に中国・朝鮮事情について広く知らしめ、卒業後、同地域へと向かうものを一人でも増やすことを目的として、生徒自身が組織しようとしたものである。田中秀作、奥村義盛という二人の教官に相談のうえ、校長矢野貫城に設立を謀ったところ、地域を限定せず世界を、経済というテーマだけでなくさまざまな観点から学ぶ研究会にしてはどうかという意見があり、最終的に中国・朝鮮の経済のみならず、世界の経済、民俗、宗教を含めた海外事情について何でも対象とする研究会を設立した。[11]

ここに見られるように、高商の調査セクションは、「商務研究」や「研究指導」といった学科目教育と、そして、海外事情研究会のような科外教育との強い結びつきのなかで設置、あるいは改組された。つまり高商の調査セクションは、教官による調査・研究の成果を教育に還元すると

いう方式で教育に間接的にかかわったのではなく、そもそも二つの顔、すなわち、調査組織と教育組織という二つの性格をあわせもち、教育に直接かかわる部門だったのである。

写真資料をとおした科外教育

彦根高商調査課で蒐集された写真資料のうち、[12]現在、滋賀大学経済学部附属史料館で保管されているは二三三点である。[13]それらの写真資料の概要は以下のとおりである。後掲の表に示したとおり、資料にはそれぞれIDとしてPの文字のあとに番号が付されている。現存分では、かならずしも連番とはなっていないが、「P5109」から「P6192」までである。まずおおきな特徴は、五〇〇〇番台と六〇〇〇番台とでは紙質と大きさが異なっている点である。六〇〇〇番台は薄めの写真用紙であり、大きさは縦横それぞれ二六一ミリ・メートル×三七九ミリ・メートルである。縦横ともに、通常の写真サイズであるL版（それぞれ八九ミリ・メートル×一二七ミリ・メートル）の三倍弱であり、面積では九倍弱となる。五〇〇〇番台は厚めの画用紙のような紙質であり、大きさは六〇〇〇番台よりも一回り大きく、縦横それぞれ二七一ミリ・メートル×三八四ミリ・メートルである。またどの写真でも資料IDは裏面に記載されているが、そこにはキャプションが付されている。キャプションには通常、被写体にかんする情報が記載されている。裏面にはこのほか、「彦根高等商業学校」の印、もしくは、〇のなかに「調」が印字されたシールが貼られているものが多い。

さらに、後掲の表には「掲示あと」の有無を記しているが、四五点を除いた一八八点には掲示のあとがある。どこにどのような形で掲示されたのは定かではない。しかし、調査課内に設置された移植民研究室をうつした写真では、室内壁面がさまざまな写真で飾られている様子がみてとれる。現在、われわれのもとにある写真資料はこうした形で掲示されていたことが推察される。[14]

科外教育における写真資料の利用の第一は、こうした掲示であろう。移植民研究室は、「教官の研究に資する外毎週水曜午後一般学生に公開」されていた。写真資料がそうした公開の機会に生徒たちの目に触れていたのである。また、海外事情研究会の会員については移植民研究室の所蔵資料の利用を促すような文言が、会の機関誌である『海外事情研究』第一輯の彙報欄に記載されている。[15]

掲示という形式以外の活用として考えられるのは、授業、あるいは講演会・研究報告会における提示であろう。[16]海外事情研究会は、如上のとおり生徒が主体となる団体であるが、生徒の発表、あるいは、教官やゲスト・スピーカーの講演を聴く例会をおこなっていた。この例会におけるテーマはとうぜん海外事情であるが、発表者、あるいは講演者が取り上げる地域を聴衆が見聞していることは少なかった。そうした機会に写真を見せ、どのような場所であるかのイメージ作りに役立てるのである。たとえば、一九三〇（昭和五）年一一月二一日の例会においては、その前の例会（同年一〇月三〇日）において講演した教官の浅見信次良が「支那満州旅行の感想」を話し、「写真絵葉書等」を見せている。[17]また、同年一二月一五日に講演をおこなった教官の岡崎文規も昭和三年からの欧州留学において訪問した「各国の風景、風俗の写真帖」を回覧している。[18]

例会における写真提示は、ゲスト・スピーカーのばあいも同様であった。たとえば、一九三一年六月一二日に講演をおこなった、名古屋の服部商会綿布部主任中村吉造（元三井物産株式会社上海支店勤務）は、綿布市場調査で訪れた、インドシナ、インド、アラビア、トルコ、アフリカにおける「綿布の需給、商取引の実際、風俗習慣等」について話したが、そのさい、「多くの写真をも」示した。また、同年六月一七日に「科外講演　東アフリカ、殊にエテイオピアに就いて」のために来校した京都大学助教授小牧實繁（のちの滋賀大学教育学部教授、第二代学長）は、講演後の、海外事情研究会における座談会において、「氏所有の写真絵はがき等によって、視力を通じて、一層の認識を得しめられた」。[19]

これらの写真は、講演者自身の所有によるものであろうが、これらの事例を敷衍すれば、調査課が蒐集した写真資料も地域のイメージや産業の様子を伝えるという教育目的で用いられたと考えられるであろう。たとえば、資料ＩＤ「P5109」の被写体はブラジルで収穫できる果物である。これにつけられたキャプションはすべて、被写体となっている果物の配置と一致しており、教育のための配慮が感じられる。

また、この写真を含めブラジルを題材とした写真は三八点（P5109～P5126、P5135～P5146、P5348、P5405～P5411）あるが、その多くは日系移住者の生活の様子を伝えるものとなっている。ブラジルの写真よりも多く、残存の写真資料の半数以上を占めるのは、満州を含む中国とモンゴルを撮影したものであり、その数一一四点（P5238～P5240、P5292～P5300、P5302～P5311、P5334～P5342、P5344、P5352～P5404、P6163～P6188、P6190～P6192）である。これらの写真は、中国等の諸都市の街並、あるいは、地域に暮らすさまざまな住民、また農林・畜産業や鉱業の様子などを伝えるものである。

注目すべきは、写真点数の多いこれらの二地域が、調査課調査委員であり、海外事情研究会を指導した田中秀作との縁が深い場所であることである。[20] 田中秀作は一九一七（大正六）年一二月二九日から一九二三（大正一二）年四月六日までのあいだ南満州鉄道株式会社の教育研究所講師として教育あるいは調査・研究に従事した。[21] そのかん彼は、「鉄道沿線は勿論或は寒気凛冽な北満を訪ひ、或は胡砂吹く東蒙に遊び、さては満州の穀倉東山地方に入ったことも一再ではなかつた」という。[22] 一九二三年四月七日に彦根高等商業学校教授に就任したが、一九二七（昭和二）年から一九二九（昭和四）年までのあいだ二年数ヶ月にわたって、文部省在外研究員としてドイツ、イギリス、アメリカ合州国、ブラジルに滞在した。[23] 調査課の所蔵する写真資料のかなりの部分は、田中が調査した土地と符合している。

田中の関心との符合は、ほかの写真資料についてもいえる。彼は植民地理学という学問の推進を提唱している。ここでいう「植民」とは国家が政治的支配を確立している植民地への入植を意味するのではなく、「或る国民が自己本来の国土以外の風土や文化を異にする新な他の地域に移住して民族的に経済的に又は政治的に発展する」ことを指す。そして田中は、政治的には支配権の及ばない地域、すなわち形式的な意味において植民地ではない地域の例として、「満蒙、蘭領印度乃至南米諸国」をあげている。[24] 調査課の写真資料において、ブラジルに次いで多くの点数が残っているのは、ここであげられている「蘭領印度」、こんにちのインドネシア（ジャワ島、スマトラ島）なのである。さらに田中は、「自然的にも人文的にも」日本国民が進出すべき場所として、「南洋、東阿

や南米」を例示している。[25] ここにあげられている「東阿」とは、「東アフリカ」を指している。写真資料には、エチオピアおよびフランス領ジブチを撮影した写真が「蘭領印度」と同じ三〇点、残存している。

このようにわれわれがいま手にすることのできる彦根高商調査課の写真資料の多くは、調査課調査委員であった教官田中秀作の問題関心に沿った地域のものであった。田中はこれらの写真資料をとおして、海外事情研究会会員あるいはほかの生徒たちにそれら地域の事情について知らしめたと考えられるのである。

おわりに

高商の調査セクションについてはこれまで、それらが蒐集した史資料のみに関心が払われ、その活動について論じられることはなかった。「調査課」あるいは「研究部」という名称からは、教官の調査研究のための組織という印象を与えるが、その実、教官の研究のためだけではなく、調査研究をとおした生徒教育に資するための組織であった。その設立や改組には「商務研究」や「研究指導」といった教科との結びつきが見られ、教育組織という性格がより強いように見える。

調査セクションをこうした視点で眺めてみると、その蒐集資料も教官の調査研究のためというだけでなく、教育のなかでいかに使用されたのかという点から論じられる必要があるであろう。彦根高商調査課が蒐集した写真資料は、調査課調査委員であった教官田中秀作の関心に沿った地域を撮影・記録した写真であった。しかしそれらの多くは田中自身が訪れた土地のものであり、彼自身の研究のためというよりもむしろ、彼が科目内外において教育をするための資料としてあったと推測される。彼はこれらの写真資料を使って、「海外雄飛」を目指す海外事情研究会会員に、そしてほかの生徒たちに自らの「植民地理学」を論じ、日本人が進出すべきだと彼が考える「満蒙」、南米、蘭領印度、あるいは「東阿」への「海外発展」を説いたと考えられるのである。

［付記］本稿は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「二〇世紀前期の帝国日本における実学実践と教養主義をめぐる文化研究」（課題番号：24520746）による研究成果の一部である。

（1）「官立高等商業学校」という名辞を以下では「高商」と略す。また、個々の高商については、「彦根高商」「神戸高商」のように略す。

（2）たとえば、阿部　安成「彦根高等商業学校における学知の集積――収集資料の分類とフィールド」『彦根論叢』第三五九号、二〇〇六年二月。

（3）『彦根高等商業学校一覧　第一年度　自大正十二年至大正十三年』、二十五頁。なお、旧字体は新字体に、カタカナはひらがなにそれぞれ改めた。また、彦根高商調査課については、以下を参照。阿部　安成「彦根高等商業学校における学知の集積」、一八一―一九八頁。また、阿部を中心として執筆された「〈資料紹介〉滋賀大学経済経営研究所調査資料室報①～⑫」『彦根論叢』第三三七号～第三六三号、二〇〇二年八月～二〇〇六年一一月。

（4）小樽高商の産業調査会もその目的を「主として北海道の重要産業を調査する」こととしている。『小樽高等商業学校一覧　自大正六年至大正七年』、附録八頁。（国立国会図書館デジタル化資料 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/941140　アクセス日：二〇一三年一〇月二三日）

（5）「第五、細則　一、校務分掌規程　第十三條」『彦根高等商業学校一覧　第八年度　自昭和五年至昭和六年』、四〇―四一頁。

（6）学校史においても同様の記述が見られる。「研究部の性格は、（ママ）これ

までの調査課の仕事が主として資料の蒐集であったのに対して、研究部は資料蒐集等の静的な活動はもとより、学生（ママ）及び一般社会人の指導という動的方面も加えたことで」陵水三十五年編纂会編『陵水三十五年』、一九五八年、四〇―四一頁。調査セクションおよびその業務は、官立高商の社会的機能、つまり地域社会において果たした役割を考えるうえで注目すべき点である。官立高商は、地域の経済活動と無縁ではない。そもそも、設立母体が国家であったとはいえ、その資金の多くは地域社会に負っていた。しかしながら、高商がその教育をとおして優秀な卒業生を輩出することは、あくまでもの国家に対する還元であり、おおくのばあい、地域社会に対する貢献とはならなかった。そこで重要になるのは、調査セクションの調査という職掌である。調査セクションは、地域の商業や経済にかんする調査をおこない、その成果をとおして地域社会への貢献をしたと考えられるのである。

（7）『神戸大学凌霜七十年史』財界評論新社、一九七六年、二〇一頁。また、兼松房治郎を記念するために兼松商店および兼松商店兼松翁記念会よりの寄附によって商業研究所が設立された翌年の一九二〇年一月には規則が改定され、それまで選択科目であった「商務研究」が第三学年において必修化された。同書、二五二頁。なお、一九二五年の規則改定により、「商務研究」は「研究指導」と改称された。同書、三二一頁。

（8）ここでは以下を参照した。『小樽高等商業学校一覧　自大正六年至大正七年』、附録八頁。なお、『小樽高等商業学校一覧　自大正一二年至大正一三年』の附録九―一一頁には、「産業調査会調査報告書」として調査報告書のリストが掲載されている。これによると第一回の調査報告書は「明治四五年」となっており、産業調査会は遅くとも一九一二年には設立されている。

（9）緑丘五十年史編集委員会編『緑丘五十年史』、一九六一年、一四頁。具体的には以下のように記されている。「なお教官の研究組織として産業調査会があった。これは校長を会長とし坂本（引用者註　陶一）教授を主幹として、農林、鉱産、水産、畜産、工産、地理、交通、経済、金融保険という九つの調査部をおいて商業経済関係の教官がそれぞれの部門を担当するもので、その指導下に主として学生が調査にあたり、毎年いくつかのすぐれた報告がうみだされていった。」

（10）『彦根高等商業学校一覧　第五年度　自昭和二年至昭和三年』調査幹事の「生徒研究の指導」という職掌は、一九二八（昭和三）年の学校一覧においては消えている。代わって、細則に「一七　研究指導論文規程」が登場し、「生徒研究の指導」がより細かく規定されることとなる。『彦根高等商業学校一覧　第六年度　自昭和三年至昭和四年』、六七頁。このほか多くの規則改定がこの年におこなわれているが、矢野貫城が校長に就任したことと関係があるかもしれない。

（11）西川　武良「海外事情研究発刊に際して」『海外事情研究』第一輯、一九三三年三月、六五頁。「〈資料紹介〉滋賀大学経済経営研究所調査資料室報③」『彦根論叢』第三三九号、二〇〇二年一二月、二四二―二四三頁。

（12）一九四〇年三月時点で、写真資料は四〇〇枚であったと『調査課要覧』には記録されている。「〈資料紹介〉滋賀大学経済経営研究所調査資料室報①」、一五二―一五三頁。

（13）滋賀大学経済学部附属史料館の広報誌『にゅうすSAM』第三九号（二〇一三年一〇月）に掲載された拙稿「彦根高等商業学校からエチオピアへ」のなかで史料館に保管されている資料を二三七点と記したが、集計の誤りであり、表のとおり二三三点が正確な数値である。

（14）『海外事情研究』（第一輯）の目次の次頁には写真が掲載されているが、これは「移植民研究ノ一部」とタイトルがつけられており、壁面に多くの写真が掲示されている様子が確認できる。

（15）「彙報」『海外事情研究』、第一輯、九一頁。同彙報欄によれば、一九三三年三月の時点で写真資料は約二〇〇点とされている。

（16）たとえば、移植民研究室を支えたと考えられる教官田中秀作は、一九三〇（昭和五）年度には「文化史」「商業地理」「植民政策」を担当しているが、とくに「植民政策」では中国、南洋、アフリカ、南米といった地域に到来した移植民を取り上げるほか、日本の移植民政策についても講義している。したがって、表にみられるような被写体を考慮すれば、写真資料が使用された可能性がうかがえる。田中による「植民政策」の授業内容については、以下

を参照。『昭和五年度　教授要目　彦根高等商業学校』、七四頁。

(17)「会報」『海外事情研究』第一輯、七三頁。

(18)「会報」『海外事情研究』第一輯、七四頁。

(19)「会報」『海外事情研究』第一輯、七六頁。

(20)『海外事情研究』第一輯の「会報」には、一九三一（昭和六）年五月五日付けの例会において、田中が当該年度の研究会プランについて話をしている。このことからも、田中が海外事情研究会の指導教官であったことが確認できる。

(21)『田中秀作教授古希記念地理学論文集』（柳原書店、一九五七年）に掲載された「田中秀作教授略歴」（三―四頁）には、南満州鉄道株式会社に勤務したことのみが記載されているが、柴田陽一によれば、教育研究所講師として勤務した。教育研究所は満鉄の地方部が付属地で運営した小・中学校の教員を養成するための機関であった。柴田　陽一「「満州国」における地理学者とその活動の特徴」石川　禎浩編『中国社会主義文化の研究（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告）』京都大学人文科学研究所、二〇一〇年五月、二九九―三〇一頁。

(22)柴田　陽一「「満州国」における地理学者とその活動の特徴」（三〇一頁）の引用による。

(23)「田中秀作教授略歴」、四頁。『田中秀作教授古希記念地理学論文集』の「序」によれば、南米ではブラジルのみならずアルゼンチンにおいても「植民の実態を探られた」。『田中秀作教授古希記念地理学論文集』、一頁。

(24)田中　秀作「植民地理の内容に就いて」『彦根高商論叢』第九号、一九三一年七月、五九頁。

(25)田中「植民地理の内容に就いて」、六五―六六頁。

資料ID	キャプション	掲示跡の有無	写真や被写体の特徴	備考
P5109	伯国産果実　パパイヤ（マモン）　パイナップル　パパイヤ半切　極小ノ方ハ／シャポケカバ　蜜柑	○	写真とキャプションの配置一致	
P5110	籾の収穫	○	脱穀、日本人家族、黒人の子？	
P5111	籾の収穫	○	農作業風景、黒人？	
P5112	珈琲耕地	○	家族？大人２人、子供２人	
P5113	原始林ノ伐木	○	ブラジル？	
P5114	芭蕉（バナナ）の草木	○	男性２人	
P5115	サルサバリーヤ／（此ノ根ヲ煎ジテ浄血済トス）	○	タテ	
P5116	植民ノ家屋	○	草原、森林	
P5117	イグアペ植民地邦人家族	○	大人３人、子供５人、犬1匹、バナナ	
P5118	イグアペ植民地邦人家族	○	大人２人、子供７人、犬１匹、バナナの木	
P5119	イグアペ植民地邦人家屋	○	牛、馬、山林	
P5120	ブラジルにて生産する日本茶	○	女性１人	
P5121	邦人の養豚	○	家族写真、大人２人、子供３人	
P5122	放牧	○	牛	
P5123	邦人植民による籾の収穫を終りて	○	集合写真	
P5124	マンジオカ耕地	○		
P5125	「クリコ」郊外に住む邦人と其家族	○	大人２人、子供４人、妻は白人か？	
P5126	アマゾニアノ木材	○	貯木場	
P5127	ライプチッヒ見本市日本部陳列図	○		
P5128	ブラッセル見本市日本部陳列図	○		
P5129	巴里見本市会場	○	高所からの撮影	
P5130	巴里見本市日本部陳列図　其ノ一	○	酒？	
P5131	巴里見本市日本部陳列図　其ノ二	○	陶器、布	
P5132	巴里見本市日本部陳列図　其ノ三	○	傘	
P5133	巴里見本市日本部陳列図　其ノ四	○	布、着物	
P5134	巴里見本市日本部陳列図　其ノ五	○	陶器	
P5135	サンパウロ市／（ドン・ペテロ二世公園よりサンパウロ市／中心商業街を望む	○		
P5136	聖州／モヂアナ線サンジョアキン駅／フルターサ耕地	○	畑	
P5137	サンパウロ州／ロエステ線リンス町	○	遠望	
P5138	サンパウロ州／リベロンプレト市	○	高所からの撮影	
P5139	サントス港に於けるバナナの積出	○	小舟	
P5140	サントス港	○		
P5141	甘蔗耕地	○	日本人家族、馬上の少女、下男？、下女？	
P5142	甘蔗耕地	○		
P5143	陸稲.	○	低木内に三畝、三人の人	
P5144	陸稲	○	タテ、稲穂、鎌を手にした少年	
P5145	陸稲耕地ノ耕作	×	馬引き鋤き	
P5146	サンパウロ州グアタパラ耕地／（珈琲園就労者家族ノ家屋（コロニア）日本人八十家族）	○		
P5147	ブタペスト見本市日本部陳列圖	○	タテ	
P5148	萊市見本市日本部陳列部　其ノ一	○	布、布製品	
P5149	萊市見本市日本部陳列図其ノ二	○		
P5150	昭和三年春季ブラッセル見本市日本部陳列場	○	セルロイド？人形、有田焼？、掛け軸、箒など	
P5151	昭和三年春季里昂見本市日本部陳列場外観	○		
P5238	機上ヨリ見タル寛城子	○		長春市内行政区
P5239	機上ヨリ見タル長春駅	○	中心に駅前広場	
P5240	機上ヨリ見タル長春日本橋通	○		
P5241	機上ヨリ見タル／ニューヨーク市	○	マンハッタン島？	
P5242	末吉船	○		
P5243	爪哇田植	○	人多数	
P5244	爪哇ニ於ケル天然護謨ノ採取	○	労働者３人	
P5245	「ボロボドゥール」塔上ヨリ「モラピ」火山（九〇〇〇呎）ヲ望ム（爪哇）	○		
P5246	「ジヨクジヤ」宮殿（爪哇）	○		
P5247	爪哇水田	○		
P5248	機那の剥皮作業	○	大人１人、子供多数	
P5249	「カカオ」実ノ採取／（爪哇、ココアノ原料）	○	人	
P5250	バタビア市街ノ一風景（爪哇）	○	馬車、商店街	

資料ID	キャプション	掲示跡の有無	写真や被写体の特徴	備考
P5251	爪哇島甘蔗園	○		
P5252	爪哇「ジョクジャ」ノ並樹道	○		
P5253	「バイテンゾルグ」植物園／（爪哇）	○		
P5254	スマトラバタクノ家	○		
P5255	スンダ女の茶摘み	○	現地女性数名	
P5256	煙草植付園	○		
P5257	サイザルヘンプの日光乾燥兼漂白	○	人３人	
P5258	サイザルノ伐葉／（シサラ＋サイザル種）	○	人１人	
P5259	アツサム種茶樹ノ植付	○		
P5260	煙草園	○	奥に家屋あり	
P5261	茶揉ミ機械	○	機械多数	
P5262	茶摘女の帰路	○	多数の人（行列）	
P5263	「バンテンゾルグ」植物園／爪哇	○		
P5264	爪哇土人（バタビア）	○	大人６人、子供４人	
P5265	スラバヤ港（爪哇）	○	遠望	
P5266	「バタビア」の魚小賣商／（爪哇）	○		墨汚れ
P5267	バタビア市檳榔樹ノ並樹	○	通り、家屋	
P5268	「バタビア」市河岸	○	中心街？	
P5269	バタビアニ於ケル竹筏	○		
P5270	バンテンゾルグ総督官邸正門／（爪哇）	○		
P5271	「カツサバ」採取	○	男性１人	
P5272	爪哇ノ密林	○	タテ	
P5292	海拉爾飛行場	○	複葉機３機	
P5293	興安嶺ノ環状線	○	環状道路	
P5294	万里ノ長城	○		
P5295	ハイラル中央大街／／海拉爾入口／中央大街ノ門	○	牛車	／／以下、鉛筆書き
P5296	興安嶺トンネル	○		
P5297	羊ノ放牧／（呼倫見蒲高原）	○		
P5298	蒙古村落／（物資ノ集積）	○	ラクダ車、包、人	
P5299	蒙古人と駱駝	○	ラクダ１頭、人２人	
P5300	蒙古人特有冬ノ燃料牛糞ノ堆積	○	馬上の人	
P5302	羊ノ放牧（海拉爾郊外ノ丘陵地）	○		
P5303	札蘭屯停車場	○	駅名のロシア語表記あり	
P5304	ラマ僧ト蒙古包	○		
P5305	熱河征戦	○	軍隊	
P5306	蒙古人特有ノラクダ及牛車／（荷物運搬車）	×	牛車、人	
P5307	万里長城占領	○	軍隊	
P5308	熱河征戦／古北口ノ戦蹟	○	河北省古北口、戦車、兵士	
P5309	黒龍江省政府	×		
P5310	斉々哈爾駅	○	汽車、人	
P5311	斉々哈爾市街	○		
P5334	撫順露天掘	○	鉄路、タテ、高所からの撮影	
P5335	天昭園移民団ノ／満州移民実習ニ於ケル実務	○	荷物を天秤棒で運ぶ二人	
P5336	刈取った大豆は馬車に積んで	○		
P5337	満州ノ萃果	×	リンゴの木	
P5338	（満州）棉花ノ収穫	○	棉摘み二人	
P5339	改良型原種メリノ－種ノ牡	○		
P5340	吉敦沿線威虎嶺付近ノ森林伐採	○		
P5341	普蘭店ノ塩田	○		
P5342	官馬山マグネサイト鉱山	○		
P5344	莞山氷結セル井戸ト水汲ミ	○	馬車、家屋、人	
P5345	アルゼンチン／グランチヤコ土人	○	家族？	
P5346	ブエノスアイレス港埠頭	○		
P5347	ペルー／フアンカコ市街	○	市場？	
P5348	サンパウロ市全景	○		
P5349	南米チチカカ湖	○	トトラ船	
P5350	ペルー／リマ市全景	×		
P5351	クスコに於ける／インカ帝国遺跡	○		
P5352	逢源金鉱砂金採集ノ盛況	○	労働者	
P5353	北満黒龍江岸大黒河附近／に於ける地方民の舊式砂金採取状況	○		

資料ID	キャプション	掲示跡の有無	写真や被写体の特徴	備考
P5354	克山市街ヲ囲ム土壁	○	馬車、徒歩の人	
P5355	海倫ノ大豆運搬	○	馬車、人	
P5356	西安市街南方ヲ望ム	○	高所からの撮影	
P5357	山城鎮市街	○	道路、人多数	
P5358	江橋部落	○	牛２頭、遠方に家並	
P5359	満洲里	○	道路、左方に家並	
P5360	吉林松花江畔	○	人、船？	
P5361	牡丹嶺	○	山林	
P5362	チチハル／薪／山	○		
P5363	チチハル筏	○	人（子供を含む）、馬車	
P5364	吉敦線／拉法山遠望	○	雪原、家屋	
P5365	興安嶺	○	山、林	
P5366	吉林	○	市街地、露店	
P5367	西安市街	○	丘陵地から撮影、子供	
P5368	経化市街	○	道路、牛、人多数	
P5369	克山市街	○	道路	
P5370	興安嶺採木場	○	木材集積場	
P5371	嫩江支流附近ノ砂洲	○		
P5372	嫩江支流附近／北満風景	×		
P5373	西安炭砿遠望	○	手前：畑作地	
P5374	チチハル郊外／北満ノ住宅	×	数軒	
P5375	敦化	○	市街、門、人、商店	
P5376	吉林全景	○	高所からの撮影、家並、水路	
P5377	興安嶺白樺林	○		
P5378	牡丹嶺	○	伐採木、人	
P5379	泰來	○	馬車、人、市街	
P5380	興安嶺中ノ盆地	○	高所からの撮影、家屋、倉庫？	
P5381	農家ノ作業穀物風選	○	人	
P5382	蚊河	○	市街、人	
P5383	東豊縣城郊外	○	馬車、畑	
P5384	克山附近稗畑	○	農作業風景、人	
P5385	泰安嶺／土煉瓦ノ乾燥	○		
P5386	安達に於ける／大豆野積作業	○	袋詰めされた大豆多数	
P5387	威虎嶺	○	家屋	
P5388	老爺山嶺	○	山、森林、電線	
P5389	泰來に於ける蒙古人児童	○	５人、家屋土壁前	
P5390	昂々溪	○	市街、馬車多数	
P5391	海拉爾	○	遠望、家並	
P5392	興安嶺／高原上ノ河流ノ蛇行	○	遠望	
P5393	洮南市街	○	高所からの撮影、商店街	
P5394	吉林北山	○	丘陵、家屋？，広場、人多数	
P5395	ハイラル馬放牧	○	草原	
P5396	吉林省／樺甸縣	○	雪原、家並、馬橇	
P5397	西安市街	○	通り、人	
P5398	東豊全景	○	丘陵地から撮影、遠望	
P5399	洮南／嗷嘛塔	○	タテ	
P5400	吉林／松花江ノ筏	○	貯木場	
P5401	洮南市街	○	家並、人	
P5402	泰來に於ける／蒙古人住家	○	家屋、人（家族？）	
P5403	克山附近ノ農家	○	塀、人３人	
P5404	大石橋聖水寺滑石採掘場	○	人	
P5405	ブラジルカンピナス／農場に於けるユーカリプト植林三年生	×		
P5406	ブラジルカンピナス農場に於ける／柑橘母本部	○	畑	
P5407	ブラジルカンピナス農場に於ける／東山農事株式会社本部遠望	○		
P5408	ブラジルカンピナス／農場に於ける學校	○		
P5409	ブラジルピンダ農場に於ける／灌漑水田	○	家屋	
P5410	ブラジルピンダ農場に於ける／米作・脱穀作業	○	大型機械、人	
P5411	ブラジルピンダ農場に於ける／マンヂオカ畑	○	人１人	
P5951	エチオピア／田舎ニ於ケル貴族ノ邸宅／其一	○		

資料 ID	キャプション	掲示跡の有無	写真や被写体の特徴	備考
P5952	エチオピア／田舎ニ於ケル貴族ノ邸宅／其二	×		
P5953	エチオピア／土人風俗	○	タテ	
P5954	仏領ソマリ／ヂブチ舊城付近／ノ市場	×		
P5955	エチオピア／首府郊外ノ村落	×	家屋密集、遠望	
P5956	丘陵上シャボテンノ密生	×	エチオピア？	
P5957	エチオピア／村落ト牧場	×		○調
P5958	エチオピアノ市場	○		
P5959	エチオピア　武士ノ騎乗	×	タテ	
P5960	エチオピア／アジスアベバ市／イムペリアルホテル	×		
P5961	エチオピア／青ナイル河上流ノ流木	×		○調
P5962	仏領ソマリ／ヂブチ港	○		
P5963	エチオピア／フランコエチオピア鉄道ノ／鉄橋	×		
P5964	エチオピア／農産物ノ運搬	○		
P5965	エチオピア／高原上ノ放牧	○		○調
P5966	仏領ソマリ　ヂブチヨリ西方高原／ヲ望ム	×		
P5967	仏領ソマリ　ヂブチ市街	○		
P5968	仏領ソマリ　ヂブチノ停車場	○		
P5969	エチオピア／南部ノ竹林	×	タテ	
P5970	エチオピア／山岳地帯ノ密林	×	タテ	
P5971	エチオピア／マレブ河橋梁	×		
P5972	エチオピア／高原上ノ農家	×		
P5973	エチオピア／獣皮ノ乾燥	○	タテ	
P5974	エチオピア／土人ノ市場／（家畜ト薪賣リ）	×		○調
P5975	エチオピア／火山地帯ノ溶岩洞	×		
P5976	エチオピア／上流ノ家庭	×	大人２人、子供２人、タテ	○調
P5977	エチオピアノ小児	○	タテ	
P5978	エチオピア人	×	タテ	○調
P5979	エチオピア／ガラ民族　男	×	タテ	
P5980	エチオピア／ガラ民族　女	○	タテ	
P6163	蘇州城内市街	×		
P6164	廣東中山大學正門	×		
P6165	盧溝橋	○	ラクダの隊商	
P6166	蘇州城外楓橋（附近ニ寒山寺アリ）	○		
P6167	上海南京路	×		
P6168	古北口附近ノ長城	○		北京市の北東
P6169	錢塘江海寧ノ海嘯	×		浙江省
P6170	古北口市街	×		
P6171	北京前門大街	○		
P6172	廣東珠江岸碼頭	×		
P6173	蘇州市中ノ運河	○	タテ	
P6174	上海江岸（フリガナ：バンド）街	×	タテ	○調、ID にＰなし
P6175	揚子江上流巫山峡	○	タテ	
P6176	北京紫禁城	×		
P6177	廣東市街（其一）	○	河岸	
P6178	廣東市街（其二）	×	河岸	
P6179	北京ノ大街	×		
P6180	漢口ノ碼頭	×		
P6181	天津市街	×	馬車、車、人	
P6182	上海税関碼頭	○		
P6183	白河ヨリ棉花ノ積出	×		
P6184	山東省泰山ノ頂上附近／碧霞元君廟	×		
P6185	天津白河碼頭	×		
P6186	北京王泉山ヨリ見タル水田	×		
P6187	北京正陽門	○		
P6188	山西省大同附近／雲崗ノ石佛	○		
P6190	杭州ト西湖	○		
P6191	八達嶺附近ノ長城	×		北京市の北西
P6192	南京明ノ孝陵	×	煉瓦造りか？	ID にＰなし

「タテ」：縦位置の意